マン・ロラン、ガンジー、シュヴァイツァーの影響も強く受け、後に「善意を世界に」「赤十字国家の提唱」という冊子を著した。

●郷土の文化発展を願う

一九四八（昭和23）年、長野県民芸協会佐久支部を発足させ、自ら支部長となった。戦後の貧しさと混乱の時代に、子どもや教師が日本の美しいものにじかに触れることが大切であると考え、七万円の資金を集め、日本民藝館長であった柳宗悦に民芸作品の蒐集を依頼し、七〇点余が届いた。それらをさまざまな会場で展示し、柳や、バーナード・リーチらを招いて講演会も開催した（現在、その作品は佐久教育会館に収蔵され、一部展示されている）。

松本民芸家具を育てた池田三四郎と対談。
多津衛百歳。1997年５月、多津衛民芸館にて。
（多津衛民芸館所蔵）

一九四九（昭和24）年北佐久町村会の賛同を得て、北佐久教育会が中心になり、「北佐久郡志」編纂に取り組んだ。この編纂事業は九年に及び、多津衛は編纂会責任者として、全四巻の刊行に尽力した。この「郡志」は全国的に高い評価を受け、後の郷土史研究や市町村史編纂の基礎を築いた。その後多津衛は郷里協和村に戻り、地元出身で現代書道の父といわれる比田井天来とその妻小琴の研究会を立ち上げた。この研究会が、後に「天来記念館」（現佐久市立）を建設する力となった。一九五八（昭和33）年、第一回佐久民芸展を開催し、毎年これを続けた。翌年には協和村公民館長を命ぜられ、地元住民たちとの交流や学習が始まった。

●八五歳から「協和通信」を刊行

一九八一（昭和56）年、八五歳を迎えてから、個人誌「協和通信」を創刊。翌年第三六回日本民芸協会全国大会において「核廃絶・軍縮の声明」を提案し採択され、協会内に「平和基金の会」が設置された。一九八三（昭和58）年「協和通信」発行と多年に亘る民芸研究により、第一回佐久文化賞特別賞を受賞した。

九四歳になって、しばらく休んでいた「協和通信」を再刊。その一号の巻頭で「君が正義に反することを行い、私が黙って君にそれをやらせておくとすれば、不正なのは私自身である。」というガンジーの言葉を引用し、憲法九条があるのに軍拡が進められている現実を黙ってみているなら、悪いのは私自身だから、この「再刊協和通信」で発言していくと書いた。この通信も数年続き、毎回数百通を発送した。一九九二（平成４）年より少年民芸夏期学校（上田民芸協会主催）が毎年開催され、ずっと校長を務めた。

一九九五（平成７）年、多津衛が蒐集した民芸の品々を展示し、多津衛の願いを長く語り伝えようと、「多津衛民芸館」（法人経営）が建設された。二〇〇一（平成13）年三月、一〇四歳の生涯を閉じた。民芸を愛し「白樺」の精神を貫いた人生であった。多津衛民芸館は今、多くの人が集い、語らう場となっている。

（吉川徹）

佐久市望月御牧原に建つ多津衛民芸館

参考文献

小林多津衛『善意を世界に・平和実現の具体化へ』
小林多津衛『美と真を求めて』用美社
小林多津衛『平和と手仕事　小林多津衛一〇四歳の旅』ふきのとう書房
『平和と手仕事』一～十六号　多津衛民芸館機関紙

佐久の先人たち⑫

平和と民芸を語り続けた教育者

小林多津衛

（1896～2001年）

柳宗悦や武者小路実篤の影響を強く受けた小林多津衛は、その精神を教育に生かし、民芸の普及と平和実現のために生涯をささげた。郡志編纂や天来研究はその後の地域文化発展に大きな役割を果たしている。

●「自己を生かす教育」への道

小林多津衛は一八九六（明治29）年北佐久郡協和村天神（現佐久市協和）で、農業を営む小林治作・つるの四男として生まれた。高等小学校を卒業し代用教員を二年勤めたあと、長野県師範学校（現信州大学）に入学。務台理作に口マン・口ランを薦められ、図書館で柳宗悦著「ウィリアム・ブレーク」に出会い、以後武者小路実篤・志賀直哉・柳宗悦らが主宰する雑誌「白樺」を購読するようになる。卒業後、武者小路が主宰する「新しき村」への入村を決意し、宮崎県日向に向かったが、悪性の感冒にかかって信州に戻った。

当時信州には雑誌「白樺」の精神を教育に生かそうとする青年教師たちがいた。この「白樺教育」は、「自己を生かし、個性を尊重し、美を愛し、平和を求める」精神に貫かれていた。修身の教科書はさっと読む程度にして、子どもたちと武者小路や柳の著作などをガリ版刷りで読み合い、ミレーの複製画などを鑑賞した。

これが地元有力者や県教育委員会で問題になり、白樺教師たちは退職や休職を迫られ、転任も行われた。白樺教師の中心的存在だった赤羽王郎や、多津衛が親しかった中谷勲らが教育界から追われた。多津衛も自分の知らないうちに休職願いが出されていたが、救いの手を伸ばしてくれた校長がいて、退職を免れた。

●戦中の暗い時代

上伊那郡高遠尋常小学校にいた時、柳宗悦を招いて講演会を開いた。柳との交流が始まり、民芸への関心も深まって、この年に多津衛は初めて猪口を購入した（のちに、猪口の蒐集は数百に及んだ）。

一九二三（大正12）年、布施尋常小学校に勤務。しかし信州の自由教育を排する動きが強まり、多津衛も転任をくり返した。一九三一（昭和6）年満州事変。軍靴の足音が響く中で、一九三三（昭和8）年、当時教員赤化事件といわれた「二・四事件」が起き、「白樺教師」の仲間も何人かは検挙され、戦中は暗い時代を過ごした。一九四五（昭和20）年敗戦を迎えた時、多津衛は岩村田小学校長に補され、翌年北佐久教育会長に選ばれた。

●マッカーサーへの手紙

敗戦後、極東軍事裁判が開かれ、日本の戦争犯罪の責任が問われた時、多津衛は連合国最高司令官マッカーサー元帥に手紙を書き、投函した。「この度の戦争は日本に大きな罪がある。しかし、連合国にもその原因がある。連合軍には日本を裁く資格はない。戦争犯罪は勝者も敗者も同罪ではないか」という内容で、占領下の日本では勇気のいる行動であったが、返事はなかった。多津衛には、国家の利益を超えて世界国家を展望することが平和への道だという考えがあった。□

小林多津衛百歳を祝う会。1996年8月、多津衛民芸館にて。
当時日本民藝館長であった柳宗理（宗悦ご子息）の姿も見える。
（多津衛民芸館所蔵）